全国中学校体育大会からみる中学校部活動の現状

The present conditions of junior high school club activities judging from a national junior high school physical education meet

1K04B214-2

三浦 龍典

指導教員

主査 木村和彦先生

副査 倉石平先生

緒言

運動部活動の始まりと言える中学校の運動部活動は、中学校生徒に与える影響は大きく、重要なものである。限られた時間の中で自分が選んだスポーツ技能を向上させ、競技を通して仲間との競争を経験し、指導者と生徒という師弟関係から礼儀というものを学ぶ。これらをふまえると、運動部活動は教育的価値があると言える。しかし、最近の中学校の運動部活動の現状は、指導教員の負担により土日の活動を行っていない部活動、少子化の問題で部活動が継続困難になり、合同で活動を行っている部活動など、様々な問題も生じている。中学校生徒のための部活動が円滑に行われているのか、疑問が生じた。そこで、中学生の運動部活動の運営を行い、様々な活動を推進している団体である、日本中学校体育連盟に着目した。日本中学校体育連盟は、活動目的を「全国中学校生徒の健全な心身の育成、体力の増強、及び体育・スポーツ活動の振興を図り、もって、中学校教育の充実と発展に寄与することを目的とする。」と掲げており、さらに、その目的を達成するための活動内容に「全国的な中学校体育大会の開催事業の開催」と唱っている。今回は、この日本中学校体育連盟が掲げている目的が達成できているのかどうかを調査することにした。

研究目的

本研究の目的は、日本中学校体育連盟、並びに全国中学校体育大会の目的を絡めて、「心身共に健全な中学校生徒の育成」、「スポーツ活動の振興をはかり、広くスポーツ実践の機会を与え、生徒相互の親睦を深める」、「中学校教育の充実と発展に寄与する」が、全国中学校体育大会において達成できているかを明らかにするということである。

研究方法

調査方法:各会場で出場チーム・個人選手の指導者の方にアンケート用紙と返信封筒を配布・・・郵送法を使用

- ・調査期間:2007年8月18日～2007年8月25日
- ・調査競技:第37回全国中学校剣道大会、第37回全国中学校バスケットボール大会、第38回全国中学校柔道大会
- ・調査対象:全国中学校体育大会の山形県で開催

された競技3種目に参加した生徒

- ・調査場所:山形県山形市、上山市、酒田市、天童市、山辺町、中山町
- ・調査項目:参加スポーツ、交通手段、参加人数、大会参加に関わる費用の割合、宿泊場所、山形訪問回数、生徒同士の交流の有無、地域文化に触れる体験の有無、観光の有無など
- ・アンケート配布数:140枚(バスケットボール42枚、柔道85枚、剣道13枚)
- ・回収結果:66枚(回収率49%)

得られたデータは単純集計し、競技以外の活動内容の結果をグラフや表で表し、公立中学校と私立中学校の予算の内訳や活動内容比較・訪問回数別の活動内容の比較の部分ではSPSSによりカイ二乗検定を使って分析した。

結果と考察

アンケート調査の結果は以下ようになった。

- ・生徒同士の交流活動を行っているのは約9%のチーム、
- ・地域文化や自然に触れる体験を行っているのは約20%のチーム、
- ・観光を行っているのは約18%のチーム、
- ・生徒に与える自由時間では1～3時間が約50%
- ・公立中学校と私立中学校の比較では、費用負担の中の学校負担のみに差がみられ、活動内容には差がみられなかった
- ・訪問活動における競技以外の活動内容では、どの項目にも差がみられなかった

この結果より、競技以外の活動(生徒同士の交流活動、文化自然に触れる体験、観光など)を行っているチームが少ないことや、生徒が自由に活動できる時間が少ないことがわかった。よって、日本中学校体育連盟や全国中学校体育大会が掲げる目的が達成できているとはいえ、運動部活動の教育的価値を促進させる働きができていないと考えられる。また、競技以外の活動を行わないチームの理由では、「予算・時間がない」という回答がすべての項目で1番多かった。夏休みという期間に行っていることで時間的に余裕はあると推測できるので、前述の結果より、競技以外の様々な活動を促進させるためには、予算面の改善が必要であるといえる。